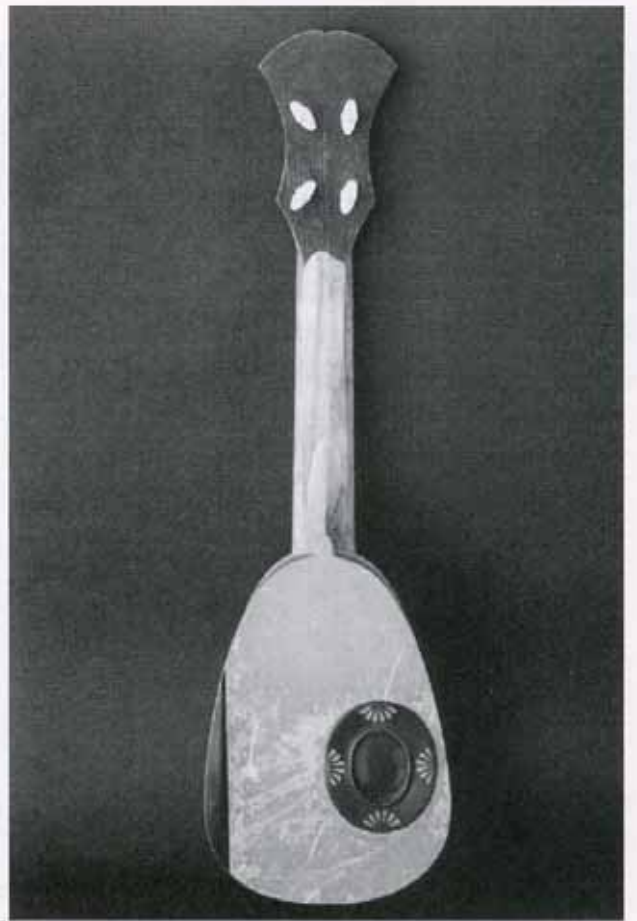


*Borderless Art Gallery NO-MA*



ボーダレス・アートギャラリーNO-MA 開設記念企画展  
私あるいは私(静かなる燃焼系)関連イベント  
2004.8.21(土) pm. 2:00-4:15  
近江八幡市博労町中第三区自治会館にて

## トークショー

### 「表現という名の謎」

講師 鷲田清一氏

(大阪大学大学院文学部研究科教授)



### 表現と限界

開設記念企画展「私あるいは私～静かなる燃焼系～」の図録を拝見し、最初の方に、すごく惹かれた言葉があった。—「このようにしか生きられない」「このようにしか世界をつかめない」「このようにしか世界と向き合えない」上等である。これほどに、信頼できるものがあるか。—この言葉に惹かれたのは、ひと月ほど前にコンサートに出かけ、同じような思いに捉われたからだ。ご存じの方も多いと思うが、現在フィンランドに在住する著名な日本のピアニストがコンサートの最中に脳梗塞で倒れた。後遺症で右手に麻痺が残ったが、数年前、左手だけの復帰コンサートを日本で開催された。最初はタッチが気になり、指先だけを見ていたが、何曲か聴いているうちに違和感がなくなり、片方の手で弾いていることがどうでも良くなってきた。ピアニストにとって利き手をつかえないというのは、それまで10本の指で弾いていたという点ではダメージではある。よく考えたら、このピアニストが使える指は5本だが、それ以外のピアニストは10本しかない。もし、20本あったら、30本あったら・・・とてつもなく、分厚い音楽ができるかもしれない。限界があるということは同じことだと思った。限界(リミット)について考える時、特に「何かを表現する」というときの限界は絶対的なものではなく、どんな表現にもいろんな限界がある。限界のない表現はない。むしろその「限界」は表現では当然あるべきもので、限界を通して何かを表現するとき、普通限界と思われているものの位置が大きく変わる。それが芸術というものではないだろうか、と考えている。

### アール・ブリュット

私は「限界」という言葉が好きだ。私たちは「限界」というと、「もうこ

れ以上できない」というようにネガティブにとらえがちだが、厳然たる限界があることで、開かれるもの、見えてくるものが、実はアートだけでなく人生にもすごく大切であると思っている。

20世紀において、アール・ブリュット(生の芸術)という芸術運動があった。デュビュッフェという人が、中心だった。幼児の殴り書き、精神障害者の作品や未開社会の作品であるとか、つまり、私たちの社会の構成員ではなく、その外輪山に位置している人たち(アウトサイダー)の芸術作品、あるいは表現活動に着目して絵や彫刻を収集し、自身でもそういう絵を描いた。「社会の中の自分」という概念(自己概念)が出来上がっていない状態で創作された作品が、アール・ブリュットではないか。そこには、深い慈しみと、それをいじめ倒す残酷さが同居している。いいかえれば、ディープに世界と交わるという意味であると同時に、世界を切り裂いていく残酷さが同居している。そういうものを見ると我々は衝撃を受けるのではないか。

### 「不気味」という存在

人間には、自分の中に抑圧して意識できないような所に押し込めてしまっている感覚がある。フロイトはそれを「不気味」と呼んだ。それは本当は自分が一番よく知っている。傷つきもし、喜びもし、不快感に包まれ、恐怖感に苛まれ、自分というフォーマットができてからは、押し隠し捨てたはずのものである。それがふっと自分のフォーマットに立ち現れてくる時のことをフロイトは「不気味」という説明をした。岩崎氏の作品で言えば、ありとあらゆるところが文字と絵で埋められていて、フレーム自体が新聞チラシを丸めた物でぎっしりで、作品の外もぎっしり。空間全体もぎっしり。その不気味さは本当は自分たちが一番なじんでいたものである。なじんでいた

けれども私というフォーマットに書き換えるときに抑圧して、その存在すら忘れていたが、ふとしたきっかけで現れる。

伊藤喜彦氏の作品をじっと見ていると、だんだん不気味になってくる。なぜかという、裂け目だらけで、一つ一つが人間が存在する以前に存在していた巨大な原生動物の鱗のように見えてくる。八岐大蛇が地面からはい出てくる胎動、うごめきに還る。うごめき自体を形にしている、命の存在の始源を形にしている

### リミットを持ち得た創造性

我々の本当の自由というのは都合の悪いことを隠すことではなく、ある強烈で非常に明確な形を持ったリミットを持つて持つほど、過激なリミットがあればあるほど、自由になっていくということがアートの世界にも言えると思う。何でも有りになってしまったアートには、「表現のリミット」が見えなくなってきている。何でも有りとなった時、つまり、ジャンルを壊し、アートを壊していった時にリミットの形が、形象としてすごく見えにくくなったのだ。そのことによって逆にアートが萎縮してしまうのではないかと危惧している。リミットが形象として、そこにしっかりした境界線がないと、人間は中心に寄ってきて、周囲にあわせようとしてしまう。自分のスタイルをそこで模索しようとするみんな似てきてしまう。我々を震撼させてくれるアウトサイダーが、外部への入り口をはっきり見せてくれると、逆に自由はもっと広がると私は考えている。

私あるいは私（静かなる燃焼系）関連イベント

2004.7.31（土）pm.1:00-4:00

ワークショップ 近江八幡市博労町中第三区自治会館にて

「夏休み!あそぼうぜ子どもたち!!私が作る私のアート」

ナビゲーター 中西恵子・宍戸信子

集まってくれたのは約15人のギャラリーNO-MAご近所さんの子どもたち。「自分の身体を感じることをテーマに動き遊びや、身体に巻き付けた針金造形。最後にその造形作品にキャンドルの火をともし、自分で命名した作品タイトルを発表し、得意満面の子ども達の笑顔が印象的だった。子どもたちみんなの「おじいちゃん」の様な白井自治会長さんの暖かなまなざしが自然にそこに在ることの素敵さ!ここはいい町です。



2004.7.31（土）pm.6:00-8:00

コンサート 近江八幡市博労町中第三区自治会館にて  
出演 月と蛙(清水彩月と岡部わたる)

夏の夕暮れ時、三々五々集まって下さった、ご近所の皆さんや「月と蛙」ファン。小さな屋台のビールのほろ酔いで、彩月さんのエネルギッシュな歌声と民謡調のリズムが浮かれ気分を拍車をかける。台風のためNO-MAの裏庭から急速変更になった自治会館の屋内だったが、熱気に包まれた楽しいお祭り気分満載のコンサートだった。



NO-MAの  
小さな夏祭り

私あるいは私（静かなる燃焼系）

関連イベント 2004.9.4（土）pm.6:30-8:00

近江八幡市為心町 かね吉別邸

身体表現ライブとトーク

「みみをすませば」

岩下徹

かね吉別邸は、今は空き家になっている大正時代初期の古いユニークな屋敷。岩下徹は、広い中庭を背景に10畳の座敷で踊ることを即決した。床の間に置いた伊藤喜彦の赤い鬼面の陶土作品（今展出展作品）以外何も無い、そして無音の舞台だった。シンプルな岩下の身体がそこに在るだけなのに観客はグイグイ引き込まれる。そして彼がまるでこの古い屋敷の主であった老人のようにも、今もどこかに潜んでいる座敷わらしのようにも見えてくる不思議な時空が展開する。岩下と観客と赤い鬼面との3点が緊張と弛緩をくり返しながら、1時間はあっという間に終わった。その時、突然の雷が鳴り稲妻の閃光が中庭を照らした。偶然とは言え「ゾッ」とするような自然の演出。これも岩下の力なのか。

この日の観客は遠路だが本当にお得な体験をした。



講演会 今井祝雄氏（成安造形大学教授、造形美術家）  
テーマ 「私の芸術観とアウトサイダー・アート」

美術の入り口で

私の美術との出会いを、このギャラリーの立ち上げやアート・サポーター事業に関わるなかでいろいろ思い出しました。小学校高学年のころ、山下清展を見ました。展覧会場にご本人がられ、買ったハガキに丁寧にサインを書いてもらったのが印象的でした。当時、山下清さんは精神科医、式場隆三郎氏によって知られ始めたころで、その後、ゴッホ展を見ました。私が美術の入り口で出会ったのが、山下清、ゴッホなど、今にして思えばアウトサイダーアートに関わりのあるものであったのです。その後、私は漫画家をめざし大阪市立工芸高校へ進学し、担任の先生から「いろいろな作品を見ろ」と言われ、ギャラリー巡りの旅をしたこともありました。

美術との出会い

1962年、大阪中之島に「グタイピナコテカ」（ピナコテカは絵画館という意味、ギリシャ語から由来）という古い土蔵を改



き、訪ねました。顔も四角い荒削りな石彫にペンキの着色をし、技術など気にせずどんどんつくり続けたその作者は、もう亡くなっていました。また、顔だけで10メートルに及ぶ大作を断崖に彫ったことのある元石工さんを訪ねたりもしました。海外でもアメリカのワッツ地区で空き瓶やコーヒーカップなどの廃品で塔を造る人、また、南仏の郵便配達人がその土地特有の石を拾って造った宮殿は、シュールレアリズム指導者だったアンドレ・ブルトンが絶賛しています。こうした作品をグラスアート（草の根アート）、ヨーロッパでは障害者の作品を含めてアール・ブリュットと呼ばれましたが、美術教育を受けていない彼らの、ただ「つくりたいからつくる」制作のスタンスに、人がモノをつくる原点を伺うことができます。その当時私は、写真や映像を使ったコンセプチュアル（概念的）アート作品をつくっていたのですが、改めて自分は造形が好きだと確信しました。

造した美術館ができました。そこで毎月「具体（美術協会）」のメンバーの個展が行われていて、足で絵を描く白髪一雄、キャンパスを傾斜させ絵具を流す元永定正、絵具入りの瓶をキャンパスに投げつける嶋本昭三など、初めて抽象絵画と、彼らの作品制作の現場を目の当たりにしました。対象物を写しとるデッサン中心の美術教育を受けていた私は、それらとのギャップに戸惑いながらも大いに惹かれる出会いとなったのです。

同じ時期、禁止されていた学外の喫茶店で昼食をして授業に戻ろうとした私は店のテレビに映る「限らない世界」と題する番組に釘付けになりました。具体のメンバーが出演し、絵とは「筆で描くとは限らない」「平らであるとは・・・」「色があるとは・・・」「形があるとは・・・」などの非形象絵画が数日にわたって紹介されていたからです。「具体」との出会いは目から鱗が落ちるものでした。

高校在学中から出品した「具体」が私の



NO-MAの成り立ち

このNO-MAがつくられようとした当初は障害のある人だけの作品を並べるギャラリーとするものでしたが、実行委員で何度も話し合った結果、「何ものにもとられない表現」という点では現代美術の先進的な作品と変わらないのではないか、常識や社会通念にとられない作品とのコミュニケーションをとおして、障害のあるなしに関わらず展開していくべきではないか、ということになりました。人は誰でも表現したいと思っているのだとしたら「人は何故モノをつくるのか」を考える場所としてボーダレス・アートギャラリーNO-MAがスタートしたのです。

「ing」展に寄せて

今回の「ing」展を私は大変期待していました。というのは、各施設の一押し作品を持ち寄った実行委員に参加しており、とても熱気を感じたからです。聞くところによると、これまで多くが捨てられてきた



学びの場であり、以降、活動の場となったのです。

絵画教室を通じて

高校卒業後、制作のかたわら児童画教室を開いていましたが、そこで4才のある女の子が、画面一杯に大きく開けた口のお母さんの顔を描き、その歯の一本一本色を違えて塗っているのが面白く、児童画から教えられることも少なくありませんでした。

そこで初めて障害を持つ小学5年生の男の子とも出会いました。青しか使わない彼に、よそ見をしているうちに他の色を出してみる。すると恐る恐る使ううちに、だんだん自分のものにしていく。その彼がこの夏大阪で個展を行いました。39歳になった彼の心は子どものままです。

アウトサイダー・アート

自分自身「なぜつくるのか」と悩んだ30歳のころ、宮崎県で50歳を過ぎてから巨大な石の彫刻を作り出した人がいると聞



彼らの作品を、おもしろいと思う職員たちがこんなにいるのかと実感しました。しかし、展示のことに難しい点もあります。多くの場合、作家は作品を通してのコミュニケーションや展示も考えて制作していますが、障害のある人たちは必ずしも見せたいと思ってつくっていません。そこで、いかに見せるかを想定していない作品をどう展示するのかは、それこそ担当者自身の「表現」になってしまいます。ひとつの考え方としては、障害者と担当者の「コラボレーション」と捉えてみたい。そんな試みも面白いと思います。これからも、このNO-MAで障害の有無を越えた、幅広いボーダレス・アートと出会いたいと思います。

## 第1回常設展解説

# 滋賀の造形活動のはじまりと 近江学園



滋賀県の福祉は「この子らを世の光に」と、障害のある人が“輝く”存在として認めあえる社会をつくろうと提唱した糸賀一雄氏らが戦後間もなく開設した近江学園から発展してきたと言われている。職業訓練として陶工に取り込まれるようになり、型抜きなどいわゆる陶器づくりが組まれるようになった。展示されている皿や壺などは貴重な当時の作品である。

しかし近江学園の陶工は何度か苦難に直面する。多額の資金を投じて築いた薪窯だったが温度が上がらず使い物にならなかった。そのため暇をもてあますようになった園生は自由に作品を造るようになり、面白いものができるようになる。それが造形活動の始まりであった。

### 滋賀における造形活動の理念

1955（昭和30）年前後に近江学園には田村一二氏の招きにより陶芸作家の八木一夫氏がボランティアとして関わるようになる。粘土を自由に操る園生に感銘しながら、指導では「粘土にふれることや作品をつくることを押しつけては、ならない」「自分から触りたい、造りたいと思わなければいいものなどできるはずがない」と言って、どこまでも作り手の主体を大切にすることを提唱した。それは滋賀県の福祉施設における造形活動の基本理念である。作品の評価も「いかに大人（指導者）の手が加わっていないか」ということが重要視されることとなった。

#### 近江学園

1946（昭和21）年に創設。当初、日本六古窯に数えられる信楽と山伝いでつながる大津市南郷につくられた。良質の粘土がその土地から採取されたことから、窯業料が充足し、粘土による造形活動がはじまった。現在は、湖南市石部にある。18歳までの知的障害児入所施設（県立）。



昭和20年代 近江学園の制作の様子

#### 落穂寮

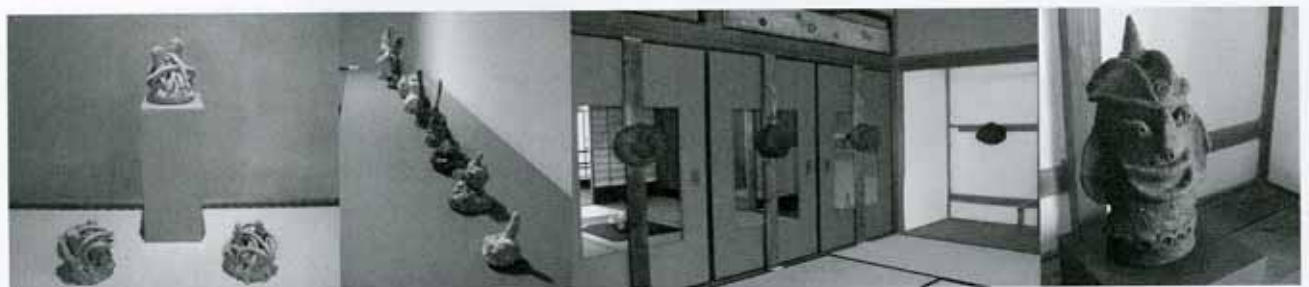
1950（昭和25）年に近江学園から分かれて、大津市南郷に開設。当初より絵画制作が指導の一環として行われ、美術専門誌にも特集で取り上げられた。1973（昭和48）年に陶芸指導者の池谷正晴氏により粘土による造形活動が始まる。「あくまでも本人が生み出す表現そのものが作品の命」と、薪で焚かれた作品は、煤をまもって黒く焼きしめられている。現在は、湖南市石部にある。知的障害者入所施設（民間立）。

#### もみじ寮・あざみ寮

1953（昭和28）年に近江学園から分かれて、あざみ寮が大津市に開設。1969（昭和44年）に湖南市石部に移転、同時にもみじ寮が開設した。土を通して、その時々自分の想いを、それぞれの固有のリズムで自由奔放に表現している。織物・刺繍の制作や舞台芸術など社会に向けた発表が積極的に行われている。現在は、湖南市石部にある。知的障害者入所施設（民間立）。

#### 信楽青年寮

1955（昭和30）年に創設。生産教育の場を求めて、近江学園創立メンバーの一人である池田太郎氏が、陶芸のまち信楽町に創られた信楽寮（後に信楽学園）に移り、さらに、成人に達した人たちのために信楽青年寮が創られた。ドキュメント映画「信楽から吹いてくる風」（1990年）「まひるのほし」（1998年）で寮の創作活動が紹介され、全国的な反響があった。知的障害者入所施設（民間立）。



2004. 11. 13～2005. 1. 10 常設展風景

1月

はじまりのアート展～アートで遊ぶ～  
アートサポーター派遣事業作品発表会

1月18日（火）～30日（日）  
10:00-17:00

主催 アート・インパクトinしが実行委員会  
滋賀県社会福祉事業団

空から降ってくるかのように次々と素敵で楽しい作品を産みだしていく、その軽やかな空気を伝える展覧会。

創作現場を訪ねるツアー第2弾

1月27日（木）13:00-15:00

主催 ボーダレスアートギャラリーNO-MA

近江学園（滋賀県湖南市東寺）を訪ねる。

\*参加ご希望の方はギャラリーまでお問い合わせ下さい

2月・3月

極上スタイル

2月8日（火）～3月21日（月・祝）

10:00-17:00

主催 極上スタイル実行委員会

松本孝夫（滋賀県/信楽青年寮）・村井崇・服部徹（滋賀県/ワークセンター・ディセンターバンバン）・野俣明宏（神楽川/わかたけ）

個人的な営みの中にある、その人間の行為・行動を、固有の「スタイル」である、と認知する。すると見えてくる、誰もが持っている本質、人間の「スタイル」をめぐるコミュニケーションの展覧会。

極上スタイル関連イベント

トークイベント・パーティー

2月27日（日）酒遊館にて  
14:30-17:00

主催 極上スタイル実行委員会

田島征三（アーティスト）をお迎えして。

3月

はた織る女たち

3月23日（水）～30日（火）

10:00-17:00

主催 木口かずみ

岡部登喜子（書家）・南塚直子（絵本画）・全日根（陶芸家）・山下ふみ子（染織）

4月

program '05 NO-MA (仮)

4月5日（火）～4月17日（日）

10:00-17:00

主催 能崎義郎

能崎義郎・伊藤理詞・金崎久美・富永翔・土井喜久香

・中村俊介・舟田亜耶子・三宅右記

（滋賀県/成安造形大学）

三人展 ～心よせて～

4月21日（水）～4月24日（日）

10:00-17:00 主催 わたむきの里

坂田三歩・辻富美子・仲上朝子

（滋賀県/わたむきの里）

4・5・6月

ギャラリーNO-MA第二回企画展

縫う人 針仕事の豊かな時間 (仮)

4月28日（木）～6月12日（日）10:00-17:00

主催 ボーダレス・アートギャラリーNO-MA 滋賀県社会福祉事業団

[予定]

中央アジアの人々の手刺繍・坂元郁代・吉本篤史（鹿児島県/葛蒲学園）・萩野とよ（滋賀県/もみじ寮・あざみ寮）

・山本純子（兵庫県）・上前智祐（大阪府/美術家）・伊藤存（京都府/美術家）

障害の有無を超え、「縫う」という仕事から生まれた様々な表現の形を見せる。世界各地で古い歴史と様式をもつ「縫い」。それは一針一針刺してゆく、長い豊かな時間の連続であり、人が本来もつ触覚的な確かさでもある。それをストレートに見せる知的障害者の「縫い」、生きることと直結した遊牧の民の「縫い」、その本質を直感的に嗅ぎ取った現代作家の「縫い」が共演する。

友の会入会のご案内

ボーダレス・アートギャラリーNO-MA友の会は、福祉と芸術の垣根を超えて作品そのものの表現を楽しむ人たちが集い、会員相互の親睦を深める目的として活動している会です。多くの方のご入会をお待ちしています。

会員の特典

- 常設展が無料で観覧できます。
- 企画展への招待券をお渡しします。
- 情報誌「NO-MAニュースレター」をお届けいたします。
- 制作現場の見学、作家との交流会など特別イベントのご案内をお届けいたします。
- 年会費3000円（一般）、2000円（学生）。

お申し込み方法

友の会入会用紙に必要事項をご記入のうえ、会費を添えてボーダレス・アートギャラリーNO-MA受付へお届けください。

ボーダレス・アートギャラリーNO-MA

〒523-0849 滋賀県近江八幡市永原町上16

お問い合わせ：TEL&FAX 0748-36-5018

発行者：社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団企画事業部

表紙

このウクレレはギャラリーNO-MAの改修にあたり野間邸の記憶をとどめる意味を込め、「建物ウクレレ計画」を提唱している作品に集約している、伊達伸明氏に依頼し、制作されたものです。

野間邸ウクレレの特徴

野間邸ウクレレの各材料は、雅やかな意匠をこしらえたこの家の特徴を活かすべく、住んでおられた野間さんがよく見たり触ったりされたであろう箇所（特にふすま）を中心に切り出されました。まずボディの天板は客間のランマ板。くり抜き飾り穴をそのままサウンドホールとして活かすように木取りしましたが、通常楽器の表板は緻密の木目でないといけませんので、コランマ板を1mm以下まで薄くした後、別の縦木目の薄い板の上に貼りつけてあります（外見は全く同じです）。裏板・側板にはふすま紙を使用。裏板の木の部分は薄く成材した台所の縁側板に一旦穴を開け、紙と一体化したふすまの取っ手をはめ込みました。長年触ったあとがおいしい味を醸し出しています。ヘッド表板は客間の天井板、裏側は台所の縁側板、そして演奏する時よくさわられるネック部分にはその丸さを活かして洗面台の横木を利用してあります。築年数が長いだけにどの木材もよく乾燥しており、その結果野間邸ウクレレはとても軽やかになりました。

伊達伸明氏解説引用

今後、ギャラリーでの展示と共に野間邸ウクレレの演奏会等、楽器として音色を楽しむ企画をご期待下さい。

新年あけましておめでとうございます  
 昨年は、ボーダレス・アートギャラリーNO-MA  
 開館にあたり多くの方々のお力添えをいただき  
 誠にありがとうございました。  
 産声を上げ二年目にあたる今年度、  
 皆様のご期待ご要望にお応えできるよう、  
 新たな展開を模索して参ります。  
 お気軽に立ち寄り下さいますよう  
 スタッフ一同お待ちしております。  
 平成二十七年一月